

特集 島を元気にする組織・V



近年、地方への移住希望者は増加している。二〇〇八年から一八年の二一年間に移住希望者の相談数が約一八倍に拡大したという報告もある。また、現在では、二十〜四十歳代の相談者が全体の七割強を占め、若い世代の地方志向やそれにもなう住宅ニーズも高まっているという（NPO法人ふるさと回帰支援センター「2018年度年次報告書」）。

他方、人口減少や少子高齢化の進展、都市部への人口集中などにより、空き家・空き地問題が顕著となっている。離島地域においても、移住希望者はいるのに貸家がない、という需給のミスマッチが定住促進の隘路となっている。

「若者の移住調査」（一般社団法人移住・交流推進機構、二〇一七年）の結果では、移住に際する不安点として、「仕事」「住宅・住居環境」「日常生活」を挙げた回答者が多く、これら懸案の解消が定住促進の鍵だと言える。

全国の島々では、地域の特色を活かした起

- ① 飲食と宿泊で仕事をつくる——島内外に雇用の場を 18
 合同会社 とびしま (山形県酒田市／飛島)
 同社社員 渡部陽子
- ② 住民とともに未来の仲間づくり——リアルな島暮らし体験や家計講座 24
 周防大島町定住促進協議会 (山口県周防大島町／周防大島)
 同協議会相談員 いずたにかつとし
- ③ 住民と移住者、双方の思いに寄り添う定住支援——毎年500人がUIJターンする島で 30
 NPO法人 Totie (香川県小豆島町・土庄町／小豆島・豊島)
 同法人事務局長 大塚一步
- ④ 交流拠点を整備、空き家の活用を模索——子どもたちや旅人も立ち寄れる空間へ 36
 市民団体 たちまち (長崎県壱岐市／壱岐島)
 篠崎千恵美／大川香菜
- ⑤ 空き家・空き地問題の解決に挑む——お試し住宅・サプリース・規格住宅の運営 42
 NPO法人 ねりやかなやレジデンス (鹿児島県龍郷町／奄美大島)
 同法人代表理事 佐藤理江



業や、後継者不足から途絶えてしまいかねない生業の継承などによる雇用の創出、空き家調査や家主との交渉による移住希望者への住居の提供、地元の皆さんと移住者との交流支援など、独自に定住促進に取り組み住民組織が現れはじめています。

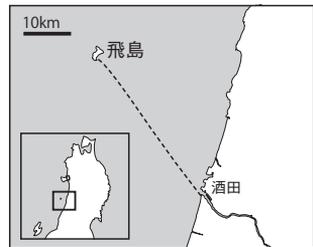
これらの組織は、島と移住希望者とをつなぐ中間支援の役割を担っており、例えば、行政が取り組みにくい分野横断型のきめ細かなサポートや、自治体の枠を超えた広域的な支援、移住者個々人の実情に応じたフォローを行なっているグループも見られる。一方、地域の方々も移住者の受け入れに対する不安や悩みを抱えている。移住希望者と地域住民双方に寄り添い、両者の希望に沿った移住の実現に努めている点も一つの特徴である。

今号では、「島を元気にする組織」特集の第五弾として、飲食・宿泊などの起業・継業、空き家・空き地の活用、地域の皆さんと移住者との交流支援、移住後のライフプラン講座の実施などを通して雇用や住宅を確保し、新規定住者の増加と定着を目指す山形県飛島、山口県周防大島、香川県小豆島・豊島、長崎県壱岐島、鹿児島県奄美大島の住民組織の事例を報告する。

飲食と宿泊で仕事をつくる

— 島内外に雇用の場を

合同会社とびしま 渡部 陽子



飛島：酒田港の北西約39kmの日本海に浮かぶ、山形県唯一の有人離島。標高68mの高森山を最高点とする平坦な島。面積2.73km²、周囲12.0km、人口189人(令和元年11月末現在)。対馬暖流の影響で比較的暖かく、漁業と観光業が主産業。島の南東側に集落がある。

山形県唯一の離島、飛島

飛島は酒田港から定期船で七五分、周囲約一〇キロメートル、人口二〇〇人弱、約一二〇世帯、日本海にある山形県唯一の離島です。周囲を対馬暖流が流れており、年平均気温は一二度と暖かく、積雪もそれほどありません。この海流がもたらす温暖な気候により、北と南の動植物が混在しています。飛島の主産業は漁業と観光業。スルメイカやトビウオ、タラ、メバルなどの豊かな海産物に恵まれています。また、飛島は渡り鳥の中継地になっており、春と秋にはたくさん野鳥が羽を休めていきます。普段は観察しづらい種類の鳥を比較的簡単に観察することができ、珍鳥や迷鳥もたびたび観察されています。

筆者は飛島で生まれ育ち、一五歳の春に高校進学のため

に酒田市内に移り住みました。

大学卒業後に飲食業を中心に数年働いた後、知り合いの方の紹介で二〇一〇年から酒田市内の特定非営利活動法人パートナーシップオフィスで働き始めました。そこで飛島クリーンアップ作戦など、飛島を舞台にした事業を通して再び島と関わることになりました。転職が訪れたのは二〇一二年、飛島振興のために行政・島の住民・教育機関などで構成された「とびしま未来協議会」の事業として島の玄関口にカフェをつくる計画が立ち上がりました。同時に、島に滞在しながらカフェの準備をしたり運営を担えるスタッフが必要になり、飛島にUターンをしました。

飛島に仕事ができ、再び住むことになるとはその時まで考えもしていませんでしたが、年々人口が減少し活気がなくなっていく島の様子を知っていたので、なにか新しい

ことをはじめの動きに関われる嬉しさも感じていました。

偶然にも筆者が島に戻って働き始めた年に、三名の若者がそれぞれ別の立場で飛鳥で働き始めていました。この三人が、後に「合同会社とびしま」の立ち上げメンバーとなる本間・松本・小川でした。

島に暮らしながら、風景の一部になる

筆者は、島の玄関口にできた「カフェスペースしまかへ」で働きながら、昔住んでいたころの島と随分変わってしまったな、と日々感じていました。若い世代はほとんどおらず、道端で会う住民は高齢の方ばかり。島を活気あるものにしようと思っても、どうしたら前に進めるのか、何から始めたらいいいのか、分からなくなっていました。

カフェの業務もひと段落したころ、それぞれ別の立場で島に関わっていた本間・松本・小川とよく話したりご飯を食べたりする中で各人の島に対しての想いを聞いたり、将来についての不安を共有しました。このままでは島はなくなってしまう、そうならないために若者を島に呼びたい。若者の雇用の場をつくりたい。何度も話し



合同会社立ち上げ期のメンバー、左から本間、筆者、小川、松本。島に住む社員のほとんどが消防団に所属している。

合いを重ねて、会社を立ち上げることにしました。

とはいっても、それまで誰も会社を立ち上げた経験はなく、十分な資金もありませんでした。島の観光業が閑散期に入った冬期間に会社設立の準備をすすめ、まずは筆者同様に島出身である本間が一人で二〇一三年三月に「合同会社とびしま」を設立しました。会社で請け負える仕事を見つけて数カ月後に小川が入社、翌年に松本と筆者が加わりました。その後、徐々に事業を増やし、二〇一九年一月現在、飛鳥と本土側を合わせて一一名の社員が所属して

います。社員はいずれも二十歳代、三十歳代の若者であり、うち九名は島外出身者です。

会社は、島の住民から相談されたことを事業化しながら、仕事の幅を広げてきました。事業の範囲は、第一次から第三次産業まで幅広く取り扱っています。具体的にいうと、

第一次産業では、飛島の基幹産業である漁業の手伝いや継承。第二次産業では、元食堂を改修した加工所での特産品やお弁当などの商品開発・販売・梱包・発送。第三次産業では、「島の駅とびしま」と名付けたお土産屋やウエブショップでの特産品の物販、「カフェスペースしまかへ」の運営などの飲食事業、旅館の運営などの宿泊事業、ツアー企画・ガイドなどの観光事業を展開しています。

また、弊社は総合的な六次産業化を目指していますが、その基盤として重視しているのが、「〇次産業」です。これは産業になる前の風景の保存・継承の取り組みであり、具体的には聞き書きや映像撮影などの記録活動、除草・除雪・海岸清掃などの環境保全・地域維持活動を行なっています。社員一人一人が住民として島の生活に深く根差しているのも特徴であり、私たちの強みでもあります。私たちは島に暮らしながら、風景の一部となり、島の未来を創造していくための活動をしています。

継業——島の旅館を受け継ぐ

最近では、飲食事業・宿泊事業がビジネスとして育っています。

飲食事業では、島内にある「カフェスペースしまかへ」のほかに、酒田市中心部に「島の炭火焼き居酒屋炭かへ」と「SUSI&SAKE BAR SHAKU」の二店舗を営業し、島の食材や米どころ酒田の美味しい日本酒などを



「カフェスペースしまかへ」口明け祭での餅まき。口明けとは漁業の現場で解禁という意味。

中心に提供しています。本土側に拠点を持つことで、食材を話のタネに飛島に興味を持ってもらったり、出会いや関わりが生まれる場として島への誘客効果を狙っています。

宿泊事業では、定期船が発着する勝浦港から歩いて一〇



沢口旅館の厨房にて。お客様が多い日は、スタッフ総出で準備を行なう。

分ほどのところにある「沢口旅館」を二〇一八年から運営しています。以前の運営者から「高齢で旅館を続けていくのが大変」という相談を受けて、弊社で引き継いだ継業という形です。筆者は現在、この旅館の運営を担当しています。

じつは、沢口旅館の前運営者は筆者の遠い親戚にあたり、祖母も母も家業の傍ら、繁忙期にお手伝いで働いてきた旅館なのです。幼いころに旅館を手伝う祖母や母のもとを訪れては、廊下を駆け回り遊んだり、一緒に食事をとったりしたのをかすかに覚えています。そんな旅館で自分が働いていることに、縁を感じずにはいられません。

旅館を引き継ぐにあたり、二年間先代の旦那さん・女将さんと一緒に働き、仕事を覚えました。お客様の送迎、食事の支度、予約の管理、客室の掃除、洗濯など、早朝から夜遅くまで絶え間なく仕事は続きます。教えてもらったことの中でも筆者が大切にしたいと思っっていることは、受け継がれて大切に食べられてきた飛島の伝統食を絶やさず、つないでいくことです。山菜が生えている場所や加工・保存の仕方、魚の処理方法や味付けなど、メモをとりながら身体でも覚ええました。

先代の手から離れ、実際に弊社のみで運営を始めてみると、予想以上に日々たくさんさんの仕事に追われ、何か問題に直面するたびに、島の人たちはこれまで大変な思いをして旅館や民宿を続けてきたのだな、と実感しています。また、日本海にある島であるため風が強いときや波が高いときには定期船の欠航が続く、宿泊予約がキャンセルになったり、帰る予定のお客様が帰れなかったり、島ならではの悩みも経験しています。

しかし、苦勞する点が多い反面、やりがいを感じるこ

も多いものです。お客様と直に接する時間が多いので、珍しい渡り鳥の情報を聞いたり、大きな魚が釣れたことを一緒に喜んだり、去年来てくれた方が今年も来てくれたり。たくさんの人と喜びを共有できるところらまで幸せな気持ちになります。

三カ月有給休暇を導入

二〇一八年から会社の新たな取り組みとして、三カ月間の有給休暇制度を導入しました。観光の閑散期間である一〇月から三月までの間に、有給休暇を各自三カ月間取得することができま

す。どうしても春・夏に業務が集中してしまい、その期間中はなかなか自分の時間を取ることができません。有休期間中は普段向き合えないようなことに時間をかけて取り組んでみたり、島外で研修を受けたり、海外へ足を伸ばしたりする人もいます。各自が思い思いの時間を過ごして、成長につなげるための時間にしてもらうことが目的です。

弊社は、二〇年後に社員を一〇〇名にする目標を掲げていますが、これは島内に限らず、本土で活動するスタッフを含めてのもの。離島に住むことは一見ハードルが高いように思えますが、この三カ月有給休暇制度を通して、もっと楽に離島に住むことを考えるきっかけになればと考えました。都市に住むことも離島に住むことも大差なく選択できるようなれば、島に住む若者は増えるはず



子どもから大人まで、島を訪れた人に魅力を伝えるツアーガイド。

島の未来につなげる取り組み

現在、新たな取り組みとしてゲストハウスを開業するプロジェクトをすすめています。資金はクラウドファンデ



12月末から3月中旬まではタラヤズワイガニ漁で浜が賑わう。

ングで募り、数年前まで島で仕事を請け負っていた建設会社の宿舎だった建物を改修中です。ゲストハウスには「へしまびと」という会員制度を導入し、年会費を払うことで一定日数の宿泊を無料にする仕組みを考えています。単純に宿泊の拠点を増やすというだけでなく、ゲストハウスを島の住民と「へしまびと」の交流の場にして、さまざまなイベントを企画・開催し、ここを入り口に「へしまびと」が島のさまざまな取り組みに関われるようにしたいのです。

また、独自のツーリズムを計画しています。今年度はモニターツアーとして、一泊二日で課題解決・アート・環境などをテーマに掲げて実施しました。島内でのフィールド

ワークや体験を通して知識を学び、深め、共有する流れになっています。来年度にはしっかりとした事業として成り立つように仕組みをつくっていく予定です。

これまで述べてきたような私たちのこうした活動が、住民の方々に最初から理解されてきたわけではありません。「住民の仕事を奪っている」と誤解されたこともあります。しかし私たちは活動の実績を示しながら、時間をかけて皆さんの理解を得ることが大切だと考えています。

島にもともと住んでいる人、島にUターンした人、島に移り住んできた人、そして「へしまびと」のように島外に住みながら島と関係を持ってくれる人。さまざまな立場の人による多種多様な関わり方により、今後飛鳥が持続可能な島になっていくのだと考えています。合同会社とびしまがその橋渡し役となって、みんなで島を盛り上げていければと思います。



渡部陽子（わたなべようこ）

1984年飛鳥生まれ。2012年に島の「カフェスペースしまかへ」開店スタッフを担当したことを機にUターン。2014年、合同会社とびしまに入社、しまかへ店長を経て沢口旅館女将を務める。